

## 第17話 帰国生の公立入試（高校）

中学と違い、高校は義務教育ではありません。そのため、高校に進学する以上、高校受験は必須になります。色々な選択肢から、自分の行くべき学校を選びましょう。

中学受験では、校風や教育理念といった側面も学校選びの大きな要因でしたが、高校を選ぶ際には、大学もセットで考えなければいけません。目指す学校が私大であれば、付属の高校を受験しない手はありませんし、国公立を目指すのであれば、高校3年間を進学校で頑張ることになります。

進学校としては、これまで出てきたような中高一貫校の他に、高校単独の私立校や、公立高校が考えられます。このうち、公立高校（都立）について考えてみましょう。

さて、都立高校といえば、日比谷や西、国立といった名前が筆頭ですが、これらの学校に、いわゆる「帰国枠」はありません。むしろ帰国の時期によっては内申書の問題なども出てきて、帰国生には不利とすら言えます。これらの学校を目指すのならば、帰国前の下調べを入念にし、通う中学校の内申に関わるテスト（基本的に中3の1学期から）をミスしてしまわないようにする必要があります。これをクリアできれば、あとは英語を主力にして3科目をこなすだけです。とはいえ、都立高の自校作成問題は中々に難易度が高く、難関私立と同レベルですので、相応の勉強量が必要です。

都立の中では「三田」「竹早」「日野台」「国際」の4校が帰国入試を行っています。

三田、竹早、日野台の3校は、いわゆる一般的な帰国入試で、海外経験が2年以上、諸々の書類を提出し、3科目+面接試験といったスタイルです。書類と面接も含めて、全てが100点満点で評価されますので、一つ一つ丁寧に準備をしていきましょう。

ここまでは入口の違いであって、3年後に大学入試が迫っていることに変わりはありません。大学入試で帰国枠は使えませんので、文系・理系にかかわらず、3年間でその他の入試科目も追いつかなければならないことも念頭に置いておきましょう。

都立を選ぶということは、付属のない大学を目指すこととイコールですね。

そんな中、一つ毛色の違う学校、都立国際について考えてみます。

現地校出身ならば試験が作文と面接だけなので、お得感のある学校として名前が挙がっていました。高校入試としてはめずらしいですね。2月の中旬までに私立の入試が終わり、最後の砦として構えている印象でした。

それが2015年、国際バカロレアコースを設置したことで注目を浴びています。気がつけば、偏差値上でも都立トップ校に次ぐ位置づけです。

### 【国際バカロレアとは】

ざっくりと説明すると、国際バカロレア（International Baccalaureate 以下、IB）とは国際的に共通化された教育カリキュラムで、その卒業証明（Diploma）を持っていることで、海外の大学への受験資格（学校によっては入学資格）になったり、その成績が大学の単位に認定されたり、奨学金の取得に使われたり、といったものです。TOEFLや国連英検といった国際資格や、GPAに近いイメージです。

まだまだ日本で認知されているとは言えませんが、帰国生の経験を活かして再び海外へと考えるのであれば、ある意味一番分かりやすいコースですね。しかし、海外の大学を目指してIBを履修し、利用できる学校を調べながらその先の進路も考え...というのは、中学生にとっては難儀ではありますが。日本でもIBを利用する大学はあり、今後も増えていくことが予想されます。日本を軸にして国際コミュニケーションに役立てる、というアプローチもあるでしょう。

秋田の国際教養大学のように、一定の地位を確立することになるでしょうか。

やや話がそれましたが、とかく高校とは、その先の進路を踏まえて色々な選択肢から選びましょう。

偉そうに言いましたが、筆者が中学生の頃は、そんなことを微塵も考えておりませんでした。15歳で学問を志した孔子は、大人びていたのでしょうね。

著者：谷口 仁

Nov 1 2016

